

第85回医療制度研究会講演会

「平穩死という言葉が生まれた理由」

東京都立特別老人ホーム芦花ホーム 専属医 石飛幸三先生

医学は命を助ける。医療は延命がすべてと思っていた。がんと闘うとって徹底的に取り除かなければがんとは縁が切れないと思っていた。定年を迎える頃になって起きる脳梗塞、前もって調べて傷害された血管を探しておき、頸動脈内膜切除術などで元に戻せば病気をさげられると思っていた。98歳の人の胃がんを切除して治したと鼻高々だった。考えてみればそれは母屋自体の老化だから、切り取れば良いという問題ではない。老いて衰えたその先は行き詰まり、医療はどこまでしなければならぬのかと思うようになった。自然という言葉は明治時代にはなかった。自然は自ずから然るということ、それを **nature** の訳にあてた。西欧文明は **nature** を支配することだが、日本の考え方は我々自身が自然の一部という考え方である。我々は戦時中たくさん人の命を失った。これがトラウマになって、命は地球よりも重いと説くことになった。これはまやかashiで、いふなれば逃げだ。命が一番大切だが、物理の重さの単位ではかかれるようなものではない。命も自然の一部、自然の摂理なのだ。

“願わくば花の元にて春死なむ そのきさらぎの望月のころ”

西行法師の歌だ。彼は武士、20代で僧侶となり、最後は歌人となった。最も日本人らしい生き方をした人。老いて衰えていずれは最終章に至る。私たちは人生の途中で病に倒れピンチを迎えた人と一緒にそれを乗り切ってきた。その患者さんたちは今どうなっているのか、医療の持つ意味は何かと思っていた時に、芦花ホームから誘いがあった。20年前に設立されたが、10年前から私は関わりを持つことになった。

芦花ホームが出来たのはバブル真最中、人生の最終章を迎える施設をつくると世田谷区が建てた。建物は素晴らしく、最近作られるものとは値段も一ケタ違う。家で高齢者を見ているのは地獄、それならここは駆け込み寺ということだ。平均年齢90才、女性9割、認知症9割、銀河鉄道スリーナイン999みたいに9が並ぶ。お年寄りも、しっかり食べていつまでも元気で、摂取カロリーは1600キロカロリーだ。ほんとにこれでいいのか、老化は学童給食とはちがう。だんだん食べられなくなってくる。本人がほしいというのならいいですよ、それを無視して恰好だけつけたら本人をいじめることになり、建前でやったらかえって苦しめる。現実をもっとよく見て、本人のために世の人のために、何をどうしたらよいかを考えなければならない。

私が最初に突き当たったのは1600カロリーの壁だった。殆どの方が認知症、がんでも死なない、メタボでも死なない。老人はだんだん食べられなくなる。若い時はあんなに食べていた自分もいまは昼飯を食わないでもいられる。若い人にはわからないだろうが大体そんなものだ。芦花ホームの人は殆どが認知症、ぼけて良かったんだ。認知が進むことは偉くなるということだ。

ホームで一番大切な私の勤めは、朝一番に入所中の人たちの顔を見て挨拶して回ること、お互いに耳が遠いから、大きな声であいさつする。「いい天気ですね」といつてくれるから、私も「いい天気ですね」と応じる。その時外は雨ですよ。どちらがほんとか、そんなことはどうでもいい。ほんとは雨だよなんて言ったら傷ついてしまう。認知症の人の機嫌を悪くするのは簡単、本人のプライドを傷つければいい。私も妻との会話で反撃します。あまり俺をいじめるとそのうち俺があんた誰だっけというようになるぞという。あれから40年！君麻呂の言うとおおりだ。認知症と言っても普通の人と変わらない、わたしと比べても50歩百歩、人間として認めあうことが大切だ。

歩けない人は尻餅をついただけで骨折を起こす。手足の拘縮を予防し、褥瘡を防ぐためには一日に何回も体位を換える。そっとやったつもりでも、足の付け根が青くなって腫れて来る。調べてみれば大腿骨頸部骨折、女性のほとんどはこのコースをたどる。これは自然の摂理、女性は男性ホルモンが少ないので、たいていの人は良くて車椅子、なかには寝たきりになるひともいるが、そうなる则ち骨が解けてゆく。そういう危険な人を預かっている。家族はそういう人を預けているという意識がない。年を取って衰えてゆく人をどう支えるか、治癒法がない人をどうしてあげられるのか、それを考えるのが私たちの使命なのだ。

寝たきりになると全身の筋肉がどんどん衰え、気管にもものが入っても咳をして出すわけにいかない。誤嚥性肺炎だ。これは苦しい、救急車を呼んで病院に入院となるが、肺は良くなってもそこまで衰えてきた反射機能の衰えは元に戻せない。老人ホームの生活にヤット馴れたのに、突然病院に運ばれ、注射針をさされる。本人は嫌だから勝手に抜く、抜けないようにと手足を縛る。自分のために人がやってくれていると理解できないのだから、虐待と思ってしまう。このような難儀を抱える人に胃瘻という方法が用いられるようになった。発達したオリンパスのカメラを使えば、15分で手術は終わり、手術料は10万円もらえる。悪い話ではないが胃瘻を入れられることは何を意味するか考えるべきである。ものを食べる人は食べたくなければ食べない。好きなものは食べるがまずいものは食べない。そうやって生きてきた人が一日1600カロリーの流動食を、時間が来れば管から胃に注入される。必要ないものが入れば十二指腸は逆蠕動を起こし、上に向かって膵液や胃液が逆走する。これが食道を通過して喉に至れば誤嚥する。反射は墮ちている。ひとたまりもない。

胃瘻は、本来先天性の食道狭窄症の新生児治療に用いられた。このような運命を背負った子供にも神様は生命を与え、人生を生きる糧を得るための食道形成術ができる年齢までのピンチヒッターとして胃瘻は用いられた。それが現代では人生の最終章に用いられる。あるときひとりの老人が、口から黄色い色を付けた経管栄養剤を吐き、それが枕に流れ、窒息して亡くなっているのを見た。おれたちは何をしているんだろうと思った。要は受け付けなくなっているのに、方法があるならしなければならぬと勘違いをしてる。体の調子は一日の間で違ってくるもの。我々人間は機械じゃないんだから一定量を与えればいい

というものではない。心臓はアップアップ、肺には痰が溜まる。看護師さんは吸引器を持って走り回らなければならない。みんながこんなことをしていていいのかと思った。家族から声が上がった。職員も共鳴した。それが“人生の最後に口から多べられなくなったらどうしますか？”という命題だった。

家族会で、100歳の方のお祝いをした。その後、午後3時から職員とご家族で勉強会をした。家族から声が出た。その人は三宅島から避難してきた老母の息子さんだった。三宅島は20年に一回噴火が起きる。80歳まで生きると4回噴火に合うという。噴火が収まって島に戻っていた息子に東京の病院から電話が入った。母親が救急病院に搬送された。病名は誤飲性肺炎。口から物が入らないから胃瘻を作りましょうと言う。選択肢は経管流動の他にないと言われ、経管が開始になり芦花ホームに帰ってきた。息子は鼻から管を入れられた親の姿を見た。

息子の話では、三宅島では食べられなくなると水だけで生きる。水だけで一か月も持つ人がいて命を終える。母親は自然に死ぬと思っていた。今更鼻の管を抜くことは良心的には厳しい。島にいて病院にお任せの状態だった自分がどうこう言える立場になかったと号泣された。

3年後私は墓参りのため島を訪れた。現地に行ってみて、どうしてそのような生き方になるのかわかった。島は何回も繰り返される噴火で、断層が幾重にも重なり最下層は弥生時代のもの、その層からも土器が出るという。厳しい自然の中で営々と、祖先から孫へと受け継がれた文化だ。その言葉は簡単だが重い。“食べさせないから死ぬんじゃない。死ぬから食べないんだ。最後は眠ったまま逝けるんだ”。

もう一人の家族がいた。8歳年上の姉さん女房が入所していて、本人は戦争に行き、生きて返ってこられた経歴がある。思いがかなって60年間一緒に暮らした妻が、夜空に向かって“殺される誰か助けて”と叫ぶ。何回も認知症の妻の首に手をかけそうになって、やっとの思いでこらえたという。誤飲性肺炎で病院に運ばれ胃瘻を付けると言われた。御親切にあり難い、しかし恩をあだで返すことになるから出来ないと言った。医者は保護責任者致死遺棄罪になりますよと言った。芦花ホームでは、胃瘻を付けずに帰ってきたら、誰が食べさせるのか、我々が誤飲させたらえらいことになるという意見もでた。御主人は言った。だれにも責任を負わせない。家内の食事介護は全部自分でやる。食事は家内が自分で食べる意思を示すまで待つ、待つて食べられるだけしか与えないと言った。空腹は最高のスパイス。単純だがすばらしい。生きて行けた実際のカロリーは一日600カロリー。医者が考えるような余分なことは一切考えなくてもよかった。そのまま生きて一年半立った在る日、奥さんは夕方になっても起きてこなかった。眠って眠って10日目に息を引き取った。とことんやった男はさわやかなもんだ。最後に、ちょっとの間二人だけにさせてくれと言ってドアを閉め中に入る。しばらく泣く声が聞こえたがそれがピタリとやみ、御主人はドアを開けてみんなにありがとうございましたと声を掛ける。一気にスタッフ全員が泣いた。よい勉強をさせてもらった。10日間水を一滴も飲まず、きれいな肌で、吸引

もせず、静かな死だった。もう一つ驚いたのは最後まで尿が出ていたことである。医師の常識は覆された。医学教育は役に立たなかった。生き物の自然な最期の代謝はこういうことだ。体の中の余計なものを片付け、捨てて、捨てて身を軽くして天に昇ってゆく。このようなことは芦花ホームに行かなければ気付かないことだった。最後を見届けることが出来てありがとうございますという言葉が自然に出る。人生の最終章、壁に貼ったたくさんの写真の中での死を、私は立ち会わせていただいて心から勉強させていただいたと実感する。

人類は昔からこのことは承知していた。2千年前のプラトンの言葉に“老いと共に死に向かうのは、死の中で最も苦痛の少ないものである”とあり、天台宗の千日回峰という厳しい修行を二回もやり遂げた‘大’阿闍梨酒井師の言葉は“最後は食べないで静かに逝く”だった。最後の時に酒瓶一本くらいはおいてほしいというのは私の考えだ。

人間には情がある。たった一人のお母さん、何時までも生きていてほしい。悩みますよね、点滴をやらないと何か責任を取らせられるような気がする。川崎協同病院事件、北里大学の安楽死の問題。あのころが現場の医師が一番追い込まれた時だった。刑法 218 条には、“老年者、幼年者、身体障害者、または病者を保護する責任があるものが、生前に必要な保護をしなかったときは3か月以上5年以下の懲役に処する”とある。幼年者、障害者や病者はこれから生きてゆくのだからわかりますが、問題は老年者ですよ。年取ったら最終章が来るのは自然の摂理、このことを全く刑法は無視している。続く刑法 219 条では、保護責任者遺棄致死罪が書かれている。方法があるのに行わなければ殺人罪だという。

法律それは国民のためのもの、形式的解釈におびえて自己保身に走って自縄自縛。老年者の生存に対して、どこまでも延命処置をしなかった場合は罰するというのは、自然の摂理を無視している。こんなものを今の時代にそのままにしているのは日本くらいのもんだ。

川崎協同病院事件の裁判官は判決理由書にこんなことを書いている。このような問題は裁判所に持ってこないでください。国民が議論してコンセンサスが出来たら法はそのとおり従うとそこまで言っている。方法があってもやらないほうが本人のためになるなら、しなくても法的には責任は問われないと主張すること、それが平穏死という言葉です。

ひとつの手紙がある。20年前のもので原作はポルトガル語、年老いた母の‘旅立ちの歌’、“あなたがたが弱い足で立ち上がろうと私に助けを求めたように、よろめくわたしにあなたの手を握らせてほしい”。子供のころは母親に支えられた。今は母親が支えられる。逝くときになって手を握ってほしいという。順番ですよ。今度はお母さんの番だ。お母さんをそろそろ楽にしてあげなければいけない。

職員といろいろ話をする。私たちは黒子ですからね。胃瘻を付けるという決断をした人がいたら、無理やり流動食を入れ肺炎にならないよう入れる量を加減する責任が発生する。そんな時には経管栄養を1000～800、800～600と下げてゆく。軟着陸するのは600キロカロリーあたりと思う。このような配慮をするようになって肺炎の頻度は減った。救急車も減った。しかし去年はまた救急が増えた。理由は入所希望者が多すぎて特

養に入れない。重症になって入所する人が多くなったからだ。

病気と老化は違う。ちらっと見るだけではその人の人生は見えない。一緒に伴走しているとその人の人生が分かる。我々は人生のバトンランナーです。たとえ頑張っても100年の長さしかない。その間しっかり生きてよいバトンを渡す。時間だけ長くても意味はない。

昔、見なし末期という言葉があった。人間の最後は神様しかわからない。高齢者の死は単に末期だと人間がみなしているに過ぎない。命を延ばすのが医者の仕事という。10年前この言葉が荒れ狂った。人間死ぬときは病気で死ぬ。死亡診断書には老衰と書いてはいけないというのだ。最近全国の特養を纏めている‘老施協’というところがデータを出した。おととしの死亡診断のトップは老衰で6割、今までトップだった肺炎は9%に過ぎないという。それだけ介護施設の医師の意識が変わってきた証拠だと思う。

老人介護施設では、介護施設専属の医師が医療行為をしても医療保険では支払ってくれない。医療機関が行ったときだけ医療保険が通用されるという考えだ。老人の体の変化の流れを知っているのは施設の医者、瞬間的な関わりだけの医師とは異なる。外部の医者は家族と話すことはない。医療機関が使うお金のことはよく話題になるが、膨大な無駄を作っているように思えて仕方がない。

私は坊さんの代わりのようなことをやっている。認知症介護で家族はずたずたになる。尊敬していた母親が、人が変わったようになるのを見れば足も遠のく。高齢者は家族から見放されてしまう。周りの人は何かあれば病院に連れて行けと言う、中には死んで運ばれる人もいる。病院の医者は普段見ていないから警察に届け出る。犯人逮捕で忙しい警察も迷惑する。どう扱ってよいかわからない。自然の大往生はそのレベルでしっかりやってくれというのが本音。救急救命士も、救急外来に配属される若い医師も、こんなことをしていて何の役に立っているのか疑問に思うに違いない。この人この間も来たじゃないか、いったい俺たちに何をやれと言うのか、人のためになろうとして勉強したのに、これでいいのかと思う。そんなことを研修医が言ったら大変なことになるが、これが現場の本音、そろそろだれかが言ってもいいじゃないかと思う。国民レベルで本音を言って話をしないといけない。

鍵になるのは医者だ。時代をしっかりと見極めて自分が責任を取るつもりで話をする。それをやらなかったら誰もついてこないよ。死亡診断書を書けるのは医者しかいない。現に老年医学会はこの10年で大きく変わった。2001年には最後まで命は救わなくてはならない。死を語ることタブーだといっていた。それが2012年ガラッと変わり、胃瘻をしない選択肢もある。胃瘻を選択しても止めることが許されると見解を変えている。

地域包括ケアが盛んに言われるようになった。多職種協働、医療と介護の連携、施設介護・看護の連携、病院の機能分化、在宅ケア推進。次々と言葉が並んでいる。だれにも一回しかない最終章、みんなで本音考えなければならない。

あるとき臓器移植を専門とする知り合いの大学教授から電話が来た。「先生は後期高齢者でしょう」ときかれた。そうだと答えると保険証の裏を見たかという。裏面には臓器を提

供する意志があるかどうかを書き込む欄がある。彼は言いました。「先生 75 年も使った臓器はおいしくありませんよ」。ある人は実際に使えるものは角膜くらいだねという。もちろん私の肝臓なんかは役に立たない。もうこんなのはやめにしましょう。

「平穏死宣言」、後期高齢者保険証の裏に答えてもらうのがいい。延命処置を希望しますか、希望しませんか？という問いと、本人署名、家族署名をしてもらう。国が制度を作るのだから国がやればよい。厚労省のある課長が言いました。実はあの保険証裏面の臓器移植意志表示欄は私が作ったと言いました。言ってみるもんだね、いまから期待しています。厚労省も、もうそろそろ変えてもいい頃だと思います。

認知症の人は心があります。私たちとおなじです。実際こんなことがありました。元高級官僚、胃瘻を付けて76才でした。胃瘻を付けられてから6年も生きていた。食べる楽しみを奪われて6年ですよ、ある朝介護職員がこの人の指が動いている。どうも棚のビールを指さしているみたいだ、飲みたいんじゃないでしょうか、娘さんがあそこにビールを置いたという。座らせて飲ませてみようかとわれわれ、娘さんもよろしくお願ひしますということになった。この日ビデオのようなすごいことが起きた。ビールの缶を手にしてじっと見る目力。このあと残ったビールをきれいに呑みほした。人にはまだわからないことがいっぱいある。この人は3か月後に静かに逝った。もう何も残っていないように思える頭の中に、まだまだわれわれが思いもしないことがいっぱい残っているんですよ。見る人はそれを見極めなければならない。人の死んだのを見たことがないと泣き出した新人女性の介護士さん、看取りをするようになって何年かして、看取りは入所の時期から始まっている、というようになった。

元個人タクシーの運転手94才はジョウ助さんといった、お客を降ろした後、どこに来ているのか自分で分からなくなった。アルツハイマーだった。芦花ホームに入所後、とにかくじっとしていない、徘徊するは、勝手にもの運びはやるは、動きについていくのが大変だった。その後確実に体力が落ちて病院に入院したら胃瘻を付けましょうという。奥さんびっくりして帰ってきた。ベテランの介護士さんが、連れて帰ってきなさいよ、私達がやったら食べるようになるかもしれない。それでもだめならそれは寿命よと言った。奥さんは病院に舞い戻りまた帰ってきた。病院での交渉が難航しているという。それならばこちらからもと、スタッフ5人で連れだって行った。相手はせいぜい2人と予測し、行ったら予想の通り。「ジョウ助さん食事食べたいか？」と聞くとジョウ助さんは食べたいと言いました。オウム返しだろうとおもいましたが、これで私は勝ったと思いました。仗助さんは大きな高カロリー輸液を付けたまま帰ってきた。IVH を抜いて、どうにか食べてくれよと思いながら経過を見たがなかなか食べてくれない。だめかもしれないと思った4日目の朝、仗助さんは腹が減ったといいだした。ジョウ助はうな重が好きなんですよと奥さん、うな重を買い、ペースト状にしてからまたかば焼きの格好に盛り付けて、うな重の写真までつけてみせた。喜んで食べてそれから元気になり、みんなの前でカラスの子の歌を歌うまでになった。さっそく携帯をとり出して動画にして、病院の先生に、いま1か月目、

うな重を食べましたよと行って送った。それから2か月後、眠って眠ってさらに一か月後に亡くなった。全てが終わって何カ月もして私は、スタッフが仗助さんが亡くなる直前、この夫婦の57回目の結婚記念日のお祝いパーティーを病室でやっていたことを知りました。その模様のDVDを作っていたので、それをお見せします。スタッフや療養者を含めて10人ほどで集まり、ギターを弾いて歌を歌って花束を贈っているのが写っています。

ジョウ助さんはもう最後だからなにか贈り物をしてあげたいと思って、看護師さんがスタッフに相談したら、奥さんが「明日が57回目の結婚式だ」と言っていたという。さっそく何人かで準備をしてパーティーを開いたのだという。ジョウ助さんはこのうたをきいていたとおもいます。人生の最後をこうこういう形で送る。みんながそれを考え実行したことを私は誇らしく思いました。

最後にこの詩を紹介します。これは星野富弘さんが30年前に作られた詩の一節です。

“いのちが一番大切だと思っていた頃、生きるのが苦しかった。

いのちより大切なものがあると知った日、生きているのが嬉しかった。”

(1986年星野富弘)

星野さんは、体操中の事故で、脊髄損傷で寝たきりになり、口で筆をはさみ、絵と詩の創作をされている傷害者の方で、御存じの方も多いと思います。この詩を添えて私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(文責中澤)